

つなぐ

世羅町立甲山中学校

第1学年 高杢 萌恵

つなぐ

世羅町立甲山中学校一年

高奎

萌恵

一九四五年八月六日。まだ私が生まれてい

ない時、曾祖父はどんなものを見たのでし

う。焼け死ぬ人々、黒い空……。

「き」と今では想像できない光景が目の前に

広がっていたんだらうな。

私の身内には、広島で戦争を体験した曾祖

父がいました。歳をとり、二年ほど前に病氣

でせくなりました。だからもう会えません。

世羅町立甲山中学校

戦時中の様子や詳しい話を聞きたくても聞け

ません。話してくれません。このことを書こ

うと思つたのは、そんな曾祖父の娘である祖

母から聞いて、当時の全てを知つたからです。

全てとは言つても、曾祖父は他人とにぎやか

に付き合うことは好まない静かな人で、あま

り自ら戦争のことを家族に語る人ではありま

せんでした。何故なのか、あまりにひどくお

そろしい光景を口にするのが辛かったからな

のか。それでも何かのきっかけで曾祖父の信

の世の地獄」と表現していきまし。もしも、あの中で妹も焼かれていたらどうしよう。一歩一歩歩きたび、ますます妹のことが心配になり、どれだけ心細かったらうと私は思いました。その後も探し続け、なんとか生きて再会できました。それからおよそ九十キロもある親の待つ家までの道のりを、歩き疲れた重い足をひきずりながら一人で歩いて帰ったのだぞかです。

それから月日は流れ、曾祖父は二年前まで
世羅町立甲山中学校

私の祖母の家で暮らしていきまし。毎年八月六日の八時十五分には、妹と再会を果たした。爆心地の方向に向かっ、姿勢を直し、頭を下げ、テレビの前で一人静かに黙禱をささげていきまし。曾祖父が言うのです。「あの日、突然おそろしい原子爆弾を日本に落とし、大さが被害にあわせたアメリカは確かに悪いし罪はあるが、アメリカだけを責めるのは間違いだ。自分たちの国を大きくしたいがために初めに攻撃したのは日本。日本の罪だっ、大

きいのだーと。

曾祖父は敬老の日や他の平和行事の時には、
自分の長生きを祝ってもらうことよりも、今
の私達が平和な時代に生きていることへの感
謝の気持ちをもたなければいけないと言っ
ていました。もし、あの時戦争がなかったら、
自分と同じように子や孫に恵まれて、幸せに
暮らしている人がいたと考えていたようです。
そんな曾祖父は、国のために戦い命を落とさ
れた兵隊さん、愛する家族を失った人達のこ

世羅町立甲山中学校

とが頭から離れることはなかったのだと思
いました。

私は、戦争があった日本を想像できません。

しかし曾祖父は被爆者であり、人生の中で戦
争があったことはまぎれもない事実です。残

されてきたさまざまな記録が私達に戦争の悲

惨さを伝えてくれます。戦後も一生きたい

という思いで懸命に生きぬいてこられた方に

ちのおおかげで私たちの住んでいる日本は今、

世界と交流を持ち、誰もが行きたい場所に行

ける様になり、物は豊かになりました。不
意に七くばられた大勢の人たちの命を無駄に
することはいけません。「平和」を全世界の人
々へ訴え続けていくことが、私達の未来への
課題です。これをどう伝えればいいのかでし
う。大人になつた時、子供ができた時、い
かは必ず伝えなければいけません。そんな時
私は曾祖父のこと話を話そうと思います。
今もお、核を持ち続けているるたくさんの
国々に、核兵器を放棄してほしいと願います。
核を持っていない日本に争いを起こさうとし
てくる国があつたとしても、負けずに平和的
な解決を強く訴え続けます。危険な物を保持
し、国同士が争うことは、人々を苦しめ、尊
厳を奪うことに他なりません。
私はもう中学生。大人に近づいています。
これから「平成」が終わり、「昭和」がさらに
遠い昔になります。当時の体験をされてきた
方も少なくなつていきます。私たちにどんな
未来が訪れるのでしょうか。私は平和をつ

世羅町立甲山中学校

ける役割を持ち、生きていきます。
曾祖父に恥じないように。

世羅町立甲山中学校

指導者の言葉

国語科 1 年生の授業では、文章の構成や展開、表現の特徴をとらえ、自分の意見や考えをまとめる学習を継続して行っています。初発の感想や学習後のまとめ、授業の振り返りなど、「書く活動」を積極的に取り入れています。また、書いた文章は「話し合い活動」にも使うため、相手意識を持たせて書くように指導しています。

本作品は、祖母から聞いた曾祖父の話から「平和」について深く考え、自分たちに課せられたものを強く意識したことが書かれています。戦時中、懸命に生きた人々の一人に自分の曾祖父の存在があり、戦争を知らない世代ですが自分事として捉えることに繋がっています。祖母の話をもっすぐ受け止め、主体的に考えを構築していることが表現に表れています。

戦後 73 年がたち、直接戦争を体験された人が少なくなる中、戦争がいかに不毛なもので悲惨なことであるかを知る人がいなくなってきました。そこで今、自分たちが生きている平和な世の中が、この先もずっと続いていくためには何が必要かをしっかりと自分の事として考えられています。自分の役割に気づき、力強く決意を表明したしめくくりで、これからの自分の生き方を見つめた作品となっています。